嵌合の技術

―豊橋市におけるジキン（金魚）飼育の民俗技術調査報告―

野地恒有

一、嵌合の技術

日本の金魚には約三〇種類の品種がある。その飼育技術の特徴は、一品種に完結して理想形として提示される基準の姿へ限りなく近づけようとすることであると指摘した。その飼育態度を「嵌合（かんごう）」と名付けた。嵌合とは、抽象的に示された「理想的な金魚」を具現化する技術のことである。一言で言えば、金魚飼育は嵌合の技術である。（野地　二〇〇三a）

ジキンは日本金魚のひとつの品種名である。ジキンの飼育にみられる調色（チョウショク）という技術は、この嵌合という技術の典型である。ジキンの最も大きな特徴は体色である。各鰭と口辺と鰓蓋が赤色で、胴体が白色であるものが理想形とされている。この理想形は六鱗（ロクリン）と呼ばれる。しかし、六鱗の体色が自然の状態で表れることはない。そこで、理想形の六鱗に嵌合させるために、ウロコを人工的にはぎ取るということがおこなわれている。これが調色である。ジキンの飼育にみられる調色技術こそ、日本金魚の嵌合という飼育技術をもっともよく示すものである。本稿では、ジキンの飼育技術の内実について報告するものである。

ジキンは、愛知県で飼育されてきた金魚である。一九五八年に愛知県天然記念物に指定された。ジキンは、シャチウオとかジオウ（地王）とも呼ばれた。尾が立って体がやや下を向く姿が名古屋城の鯱に似ているところからシャチウオとも呼ばれる。ジキンは、寛文・延宝期（一六六一～一六八〇）に作出され、寛政（一七八六～一八〇〇）の頃、牧田孫兵衛が金魚の腹に葵の紋を染め描いて藩主に献上し、賞賛されてから飼育が盛んになった。文化七年（一八一〇）の五柳軒蔵六庵による「金魚飼様」という書には「地金」・「地金魚」の名がのっている。一八六〇年代後半には、名古屋市を中心に「ならべ会」という品評会が開催された。一九二〇年代後半には、「六鱗保存会」が設立され、そこで観賞基準の制定や品評会が行われてきている（松井　一九六三：三〇～三三、一九七二：二五～二六、九

五～九七）。現在は、「四尾の地金保存会」によって品種の保存がなされ、品評会や観賞会が開催されている。

金魚を飼育したり観賞したりする立場は、（A）孵化後の成魚を飼育するものと（B）採卵・孵化・育成という金魚の生活史をトータルに管理して飼育するものに大別される。（A）には一般家庭で飼育する者が相当する。「癒し」という言葉でとらえられるのは、彼らの飼育態度である。（B）は、さらに、（a）経済的活動と（b）非経済的活動に分類される。販売・出荷を目的として大量に金魚を飼育する生産者は（a）であり、優秀な金魚の作出に重きをおく飼育者は（b）である。本稿で対象となるのは、（B・b）に属する人たちの飼育技術や観賞法である。

二、聞き書き・ジキンの飼育

■豊橋市東幸町のKOさん（昭和一二年生まれ）に、ジキンの飼育や観賞についてお話を伺った。以下はその聞き書きである。文中の「Kさん」は話者を示す。

ジキンの姿

ジキンの観賞には体形と体色が大事である。とくに体色の制約が厳しい。ランチュウ（金魚の品種名）は一定の形を作ればよく、色の制約はない。ジキンの体色は白で、次の六カ所だけが赤くなければならない。赤くする部分は、クチベニ、マエビレ、ハラビレ、セビレ、カジビレ、オである。これをロクリンショク（六鱗色）という。ただし、飼育者の好みによって、ホオベニといって、頬の部分にも赤を残す人もいる。これはよい。全体の三分の一以上赤が残ると、見苦しい。オヤボネ（セビレの一番前の骨）は赤くなければならない。ジキンの体色が白くなっても体形のよいものは繁殖用のオヤとして残すが、観賞の目的からいえば、規定のところに色の出ないジキンは無価値である。セビレの一本が白くなっただけでも無価値になる。これがほかの金魚と異なるところである。それぞれの金魚には体形の基準がある。体形は飼育の過程で作ることができるが、体色はどうしようもない。

体形では、口先から尾の付け根までを体長として、これを一〇〇として、セビレから腹のサガリ（最下部）を体高として、これが六〇から六五が体形の基準（理想形）である。短く見えることが大切である。体形をできるだけ短くしてきた。

尾の基本形には、ササワレとコマワレがある。尾のつき方が体に対してどういう風についているかによって、ウオの泳ぎ方が変わってくる。尾の発育によって尾が立つと、水の抵抗で、自然に頭が下がって逆立ちしてしまう。下の尾（シタオ）が極端に張りすぎると、ウオが頭を下げる。それでは泳ぐことができない。逆にシタオがたたんでしまうと、尾のよさが見えなくなる。ウワオとシタオのバランスがうまくとれないと、よい姿

のウオにはならない。

■Kさんは、ジキンのことを、しばしばウオという。

交配・産卵・孵化

三月の彼岸の頃に、池の掃除をして、オヤにするウオを選ぶ。オスとメスの組み合わせを一組つくってこれを池に離す。オス一匹に対してメス一匹で交配をおこなう。オヤが異なるものどうしを掛け合わせる。飼育者によっては、メス一匹に対してオス二、三匹で交配している。一匹のメスに多くのオスを掛けあわす方が産卵効率はよい。しかし、この場合、よいウオや悪いウオが出たときに、オヤの特定ができない。

■Kさんは、系統管理上、一対一で掛けあわせているという。それらの交配の結果から次の組み合わせを考えるという。

三月彼岸頃から五月半ばまでが繁殖期になる。遅いときには六月までかかるときもある。その間に、いろいろな組み合わせをして、卵を採る。

採卵の方法は、自然に産ませる自然交配と、人工的に採卵する人工交配がある。自然交配のほうがウオを傷めない。ホテイアオイを使って産卵させる。ホテイアオイは根が長くて、柔らかいので、ウオを傷めない。人工的なものを底に敷いて、上から落ちる卵を受けるようにしてある。人工交配では、サケと同じように、腹を押して卵を出して、オスの精子も同じように出しておこなう。この場合、どうしてもオヤを傷めることが多い。だから、できるだけ自然に産卵させる。人工でやった方が孵化率は高い。

ジキンは尾が立っているので泳ぎが遅い。泳ぎが下手なので、産卵もあまりうまくない。オスがメスを追うのが遅い。放精と産卵のタイミングがうまく合わない。つまり、孵化率がかなり低いということである。卵を産みきるには二、三時間、長いときには半日ぐらいかかる。その後、一週間から一〇日くらいたつと、また産卵する。

一回産卵させると、その池の水を一回抜き、新しい水を入れて、その池でそのまま孵化させる。次に同じウオの卵を採ろうと思ったら、別の池で産ませる。ヒトハラ（一回の産卵）はヒトイケ（ひとつの池）で飼育する。一匹のオヤで、卵を採るのは、だいたい三回まである。産ませようと思えば何回でも産ませることができるが、その場合、卵の成熟度が落ちる。だいたい一週間から一〇日に一回の割合で産卵させる。ふつう二回卵を採る。よほど気に入ったウオでないと三回までは卵を採ることはない。

採卵が終わって、四、五日で孵化する。それからエサとしてミジンコを与える。ミジンコは渥美半島の先までも行って取ってくる。孵化後約一週間で、最初の水替えをおこなう。以後、三、四日に一回の割合で水を替える。孵化したジキンの体形には長いものや短いものも見られるが、体形の短いものは出にく

い。選別の段階で、体形が短いものを残していく。

オヤが異なる稚魚をいっしょに池に入れることはない。同じオヤの稚魚でも、イチバンコ（最初に孵化したもの）やニバンコ（二番目に孵化したもの）など産卵時期の異なるものを同じ池に入れることもない。これらはまったく別々に飼育していく。同じオスとメスの組み合わせで、たとえばイチバンコ、ニバンコと孵化しても、最初に取ったウオがよいときもある。後からのものがよいときもある。両方がだめな場合もある。同じオヤの組み合わせから採ったからといって、同じものが出るということはない。人間のキョウダイとまったく同じである。同じオヤの稚魚でも産卵時期の異なるものは、まったく別のウオとして、池を別に用意して、飼育する。そのため、かなり池の数が必要となる。池の数は六〇ほどである。ウオがあるていどの大きさになってくると、さらに池が必要になってくる。選別をできるだけ厳しくやって、悪いものを捨てて、ウオの数を少なくしていかないと、池が足りなくなる。そのようにしないとよいウオができない。

エサ

八月くらいまでエサとしてミジンコを与える。七月のはじめから人工のエサも混ぜて与える。最近はミジンコがとれなくなったので、エサにブライシュリンプ（エビの卵）を使う人が多くなった。ブライシュリンプを使った方が、ウオの大きさにばらつきが少ない。ミジンコの大きさは大小いろいろあるので、よく食べるウオは早く大きくなるし、食べないウオは発育が悪くなる。

エサは公平にやらなければならないが、特定のウオに思い入れが生まれてくると、エサのやり方が不公平になってしまう。そうなるとウオの生育が変わってくる。商売ではないので、そのような思い入れも出てくる。

選別

最初の選別は、早い人で孵化後二週間目くらいから始める。尾形がフナオ（尾が開いていないもの）や一本のもの、体形が崩れているものなどをはねていく。最初の段階では、おもに尾の形ではねる。以後、水替えをするたびに選別をおこなう。三、四日に一回の割合で水替えをするが、池の数が多いと手が回らないので、一週間に一回の割合になる。かなりの回数の選別をおこなうことになる。池の数に余裕のある場合には、あまり選別をおこなわないで、あるていどの大きさまで育ててから選別をするほうが、尾形の悪いものや体形の悪いものを、はっきり見分けることができる。しかし、その場合、エサの量が多くなり、ウオが大きくなると池の数も増やさなくてはならない。

ヒトハラ（一回の孵化）で稚魚は三〇〇〇匹から五〇〇〇匹出てくる。それが選別されて、五〇〇匹くらいになる。五〇〇匹くらい残ればよい方である。その五〇〇匹くらいが調色の対

象となる。もっと少ない場合も、また、もっと多い場合もある。最終的にはヒトイケ（ヒトハラ）で八〇匹から二〇匹くらいまでに選別をすることもある。ヒトイケに何匹入れるか池の割り振りによって選別のペースは異なってくる。

ウオの選別は、よいウオになるかどうかの分かれ目である。初心者ほど選別でウオの数を減らすことができない。捨てることが、よいウオをもっとよくする決め手である。初心者は選別の仕方と思い切りが悪い。ジキンの体形は生まれついたもので直しようがない。

ジキン飼育の特徴―調色―嵌合の技術

ジキンは、早いもので六月半ばくらいから、ふつう七月半ばから体色が変わる。これをイロガワリという。その段階でチョウショク（調色）をおこなう。調色とはウロコをはぐことである。はいだところは白くなる。七月のはじめの頃からとくに忙しくなる。選別もしなければならないし、色の出てきたウオは調色をしなければならないから。調色はウロコをはがすことによっておこなっているが、明治の頃まで、ウメズや塩で調色をおこなっていた。塩をじかにウロコにすり込んで調色した。

調色をおこなう金魚の品種には、ジキンのほかにナンキン（金魚の品種名）がある。ナンキンでは、食塩を体にのせて体色を更紗模様（まだら）にする。ナンキンは自然体色で更紗が出る確率がかなり高い。スアカでマッカになるものもあるし、オヤの配合で白になったり更紗になったりする。しかし、ナンキンの観賞には色の制約はない。それに対して、ジキンの観賞において色の制約は厳しい。その上、ジキンは自然体色でロクリン色が出ることはない。ジキンは調色をおこなわないと、ワキンのように全身が赤い金魚になる。自然にはロクリン色は一〇〇パーセント出ないため、ジキンとしての色の要件は満たすには調色は絶対に必要である。

■イロガワリといっても赤色に変わるわけではない。稚魚の体色は黒であり、そのため稚魚はクロコという。イロガワリとは、その黒色の体色が黄色味を帯びてくることである。それがやがて赤くなる。それを色が上がってくるという。

調色作業

六月半ばから七月半ばには、体長が三～四センチメートルになる。ウロコをはいだ部分に新しいウロコが再生しても、きれいに仕上がっていない場合がある。調色が遅れて、色が上がってきて、体色が赤く付いてしまって、赤が必要以上に残ってしまうこともある。そういった場合には、もう一度それらの部分を取らなければならない。

イロガワリの時期を逃すと調色はできない。赤くなったジキンのウロコをはがすとまだら（更紗）になってしまう。イロガワリの時期なら、はがした後に残ってしまった部分を、後から

はがすこともできる。ホオベニのマワリ（縁）に赤が残ることが多く見られる。ほおの骨の角の部分に残った赤のところはとりのぞきにくい。赤の部分が残ってしまった場合、そこはなかなかとれない。ウオの体形を見て無理に取らないで、赤を残したままにすることもある。とらずに残すのは簡単である。ロクリンの六カ所を赤くすることが重要であるが、近年、ホオベニといって、エラブタのところを赤く残す人が多くなっている。この一〇年は残すようになってきている。最初、ホオベニを残すのは飼育者の好みだったが、飼育の本などには、ホオベニを残すべきとなっているのも出ている。

調色をするのは一回だけである。調色をおこなうタイミングが一番むずかしい。色がどのくらいまで上がってきたときに調色をおこなえば、ウロコが白くなるか、それは経験からしかわからない。調色のタイミングは、池の環境によっても異なる。日当たり、風通し、水の替え方など、人によっても異なる。極端な場合、全身赤くしてから、その赤くなったウロコをはいでいく人もいる。それは剃刀でウロコをとるという話である。そうするとウオを傷めるような気がするが、それでも慣れてやっていれば可能であるようだ。あるていどイロガワリをした段階でウロコを取っていくのが、一番安全であり、ウオにも影響がない。ジキンは、何代もウロコを取られてきているので、遺伝子がとられても平気なようになっているのではないか。

ウロコをはぐのはかなりむずかしい。無理にやればウオは死ぬ。どのようにウオに傷を付けないようにやるかが、重要である。当たりをとても柔らかくして、ウロコを取るというよりもウロコをなでるような感じでおこなう。ウロコに軽くさわるような感じでとらないとウオの体を傷つけてしまう。あまりきつくやると傷が付いて、そこへスイセイ菌がつく。そこにワタのようなものがついて、それが原因で死んだりすることがある。初心者は、ウロコのはぎ方で苦労する。初心者は一〇匹やったら六匹ぐらいは死ぬ。

■Kさんの場合、一〇〇匹やって、死ぬのは一匹か二匹ぐらいで、ほとんど死なないという。

すべての金魚のウロコを取れば白くなる。ワキンなどもウロコをとれば白くなる。トサキンでおこなったこともある。ただそれをおこなっても、そのウオの値打ちは上がらない。ランチュウでも調色によって更紗模様に作ることはできるが、ウロコの並びが乱れる。とくにランチュウはセビレがないので、ウロコ並びが乱れると、観賞魚としての価値が下がる。調色を無理にやることはない。

ウロコが乱れる

イロガワリしたウロコをはぎとると、色素が破壊されて白いウロコが生えてくる。そこの部分の体色が白くなる。ウロコをとると、その下にはウロコの形をした皮膚が残り、そこに同じようなウロコが生えてくる。同じ並びにあるウロコの一部をは

ぎ取って、そのウロコが再生した後に、その並びと上下の並びが変わってしまうことを、「ウロコが乱れる」という。ウロコを一部だけとると、大きさの異なるウロコが再生されたり、ウロコが全部再生されずに一部だけ再生されたり、ウロコが飛んで再生されてしまったりすることがある。これがウロコの並びに乱れが出るということである。

ウロコの状態も観賞の対象になる。ウロコは、できるだけ細かく、つやがあるものがよい。ウロコをとるということはウオにとってかなりの負担になる。何回もやれば、その分だけ発育が止まる。できるだけ一回で済むようにするのがよい。

イロガワリと水温

例年五月一〇日前後に冷え込みがあるが、今年（二〇〇三年）の場合、五月八日から一五日ぐらいまで冷え込んで水温が上がらなかった。五月一〇日ごろの産卵には奇形が多くみられた。産卵して五日から六日で孵化するのがふつうであるが、今年の場合、一週間ぐらいかかった。一週間たつと、ヒトイケ（ヒトハラ）で、四〇〇〇から五〇〇〇匹入っているが、今年は四〇から二〇〇というところだった。選別して、七月頃までには例年一五〇〇から二〇〇〇匹は残るが、今年は七〇〇匹残るかどうかというところである。フナオのようにオの形が悪いものが多かった。ウオの形はよかったが、オの形が悪かった。そして、六月になってからイロガワリが連続しておこらなかった。例年、八月上旬には、その年に生まれたウオ全体の半分以上がイロガワリしているが、今年は八月上旬現在でまだ全体の二割から三割である。しかし、早い時期にイロガワリすると体色が白くなってしまう。イロガワリの時期は遅いほどロクリン色に近くなる。八月二〇日から二五日頃にイロガワリをすると、「色のブドマリ」がよい。色のブドマリとは、指定されたところ（六カ所）に色が残ることである。それらの一カ所でも白くなると、ジキンの価値はなくなる。

水温が高いと色の付き具合が悪い。おおいをかけて水深を深くして水の温度が上がらないようにする。ジキンの色を作り上げるまでには水の管理がむずかしい。二歳三歳になると色が抜けていってしまうこともある。それも水の管理が影響する。きれいな水でもよくないし、アオミズが濃すぎてもいけない。ランチュウやトサキンに比べて、ジキンは水の管理がむずかしい。

二〇〇三年八月現在、朝五時から五時三〇分にジキンのイロガワリをチェックする。色の変わってきたウオから調色する。水温が高くなる前に調色する。高くなってからだとウオが死ぬ。また、四日から五日、あるいは一週間に一回の割合で池の水替えをする。元の水を少し残して、新しい水と併せて池に戻す。ウオに水の変化を与えないような飼い方をしている。

イロガワリしたウロコを取る。ウロコに沿ってとる場合とウロコとは逆にとる場合がある。要は、ウロコの下の、肉の粘膜を傷めないようにすることである。あたりがきついと皮膚を傷

める。するとウロコの並びが悪くなる（ウロコが乱れる）。ウロコが再生されずに肉がむき出しになることもある。あたりの柔らかいへらがよい。セルロイドのへら、小指ののばした爪、ストローを斜めに切ったものなどを使っている人がいる。へらは幅のある方がウオに負担がかからない。

■Kさんのへらは、長崎の業者に作ってもらったというべっ甲製のものである。長さ約五センチメートル、幅約一センチメートル、厚さ約〇・五ミリメートルといったところである。それにキーホルダーをつけている。なくさないためだという。そのほかにも、形や大きさの異なるべっ甲のへらを革の小ケースに入れている。Kさんは、池からジキンをタモ網ですくい上げて、白い洗面器に移す。そして、洗面器に左手を入れると、そっと掌に一匹のジキンをのせる。ジキンはKさんの掌の上で、はねることもなく、しずかに横たわっている。体長は三、四センチメートル、体の厚みはなく平たい形をしている。全体に金色味を帯びた黒色をしている。それがやがて赤くなっていくのだ。Kさんは、ジキンを掌にのせたまま、腹、裏側の腹、頭の上、ほおの順番に、べっ甲のへらでなでていく。なでているように見えるが、ウロコを削り取っているのだ。ロクリンショクとして赤くしたい部分以外のウロコを削り取るのである。ウロコをはいだところは白くなる。そのあいだもジキンはおとなしくしている。その時間は三〇秒から四〇秒である。それでも、私が見ているので、いつもよりゆっくりやっているのだという。終わると、そのまま池に放す。掌でじっとしていたジキンは、何ごともなかったかのように泳ぎ出す。

調色以後の飼育（八月〜九月）

七月のおわりまでに、選別はほとんど終わっているので、見苦しいウオは残っていない。体形が長いとか短いというものは残っている。すべてを調色してから、ウオが安定した段階で、本来のジキンの型のものとそうではないものに分類する。ジキンの体形に近いものを、それ以後には飼育していく。

八月下旬から九月頃に、観賞用になるか繁殖用になるかという、あるていどのめどがついてくる。その時期に、観賞用と繁殖用に分類される。そのほかに、愛好家から分けてほしいという要望がかなりあるので、それに対応する分を多少残す。しかし、めったやたらに人に分けるということはしない。その他に金魚屋さんに出す場合もある。

「ジキンになる」には、体長一〇〇対体高六〇の体形になっている、尾形のウワオとシタオのバランスが整っている、色がロクリン色に仕上がる、これらの三点がそろっていなければならない。これらの三点をクリアして、はじめて残すということになる。それは観賞用のジキンである。このほかに、繁殖用の

ものも残さなければならない。系統を残していかなければならないから、体形が一〇〇対六〇に近いものは、色の仕上がりに失敗しても残す。観賞用とは別に、セビレが全部白くても、そういったものも残しておく。その場合、体形と尾形が大切である。繁殖用は、品評会が目的ではなく、ジキンという品種を保存していくことが目的である。

たとえば、今年ヒトハラのウオからジキン型のウオが出たと仮定して、来年その同じオヤで同じものが出るということにはならない。それが生き物を飼育するむずかしさ、繁殖のむずかしさである。同じオスと同じメスの組み合わせで、翌年同じように卵を採っても、同じような子は出てこない。ほんとうによいオヤというのは限られてしまう。よいオヤを確保することが一番苦労するところだが、それをやっていかないと、ジキンの保存ということができない。オヤは体形が一番重要である。ジキンの体形を伝えてくれるオヤの系統を守っていかなければならない。系統を保存していくことが、ジキンを飼育する我々に与えられた仕事である。それを次の若い人に伝えてやらなければならない。そうでないと、ジキンは消滅してしまう。そういう志をもってくれる人がたくさんいてくれればよいが、すべてそういうわけにはいかない。それが保存会の悩みである。ジキンの生産は商売でやっているのではない。生産者という意識はない。これで飯を食おうと思ったらとてもやれない。保存会の運営は会員の会費と寄付である。

調色以後の飼育（九月〜一一月）

九月から一一月は「ウオの仕上げ」である。仕上げとはウオが理想的な姿を見せるようにすることである。ウオの状態を見て、水を替え、餌の量を加減する。水の管理をして、ウオの体形が崩れないようにする。餌をやりすぎると肥満体になる。美しく見える体形と泳ぎを常に保たせるようにする。年齢を重ねてくるとウロコの白色が悪くなる。これをサビルという。腹の部分の赤色をわざと残して「野生美」をあらわすこともあるが、腹が黒くなったものを「カゼを引いている」という。

アケサンサイから実際に繁殖に用いる。アケサンサイとは数え年で三歳（満二歳）のウオのことである。一〇月末におこなわれる品評会には、トウサイ（その年に生まれたもの）の部、ニサイ（満一歳のもの）の部があり、サンサイから上はすべてオヤウオの部ということになる。ジキンの寿命は八歳から一〇歳くらいまでである。品評会に出して、よい姿が見せられるのは六歳くらいまでである。昔は六歳ウオまで品評会に出てきたが、最近ではそのようなウオは少ない。八歳くらいまでは繁殖用として使える。サカリ（繁殖結果として一番よい成績を残せる時期）は五、六歳である。

繁殖

ジキンは三歳がタメシドリの歳である。そのオヤがどのような子を出すか試してみるときである。四歳から六歳の頃がオヤ

としての能力が高い時期である。ナンキンでは昔ながらのやり方で四歳以上がオヤである。

■Kさんのところでは八歳のオヤが最長であったという。

ジキンは狭い範囲で飼育されているので近親交配になりやすい。近親交配が続くと奇形や体の弱いウオになる。系統の管理が必要である。しかし、異なる系統のウオを掛け合わせればよいというわけでもない。何代か前に優秀であったオヤを共通にもつものを掛けあわすとよいように思える。何代先に同じオヤがいるか、同じオヤのものを掛けあわせるとどうなるかなど、いろいろ試みている。そして、繁殖成績を記録する。子をとったオヤには名前を付ける。最初にもらい受けたジキンは「アカネニシキ」といった。「白茜姫」「白茜」などの名前を付けた。名前を付けて系統管理をしている。

飼育の本当の楽しみは、一、二月の頃、オヤの交配を考えている頃である。これとこれを掛けあわすとどうなるか、これとこれを掛けあわせようかなどと考えながらおこなう。五月中旬まで産卵させるまではこの楽しみがある。（交配の結果は六月中旬から七月中旬にわかる。）それ以外は楽しみというよりも作業である。いかに効率よく作業をするか、エサ場を確保するか、それは自動車工場と同じことである。また、秋、ウオができあがってくる頃も楽しみの時期である。色がきれいに仕上がってよい泳ぎを見せてくれる、この時期も楽しみである。ジキンの飼育は好きでなければできない。

品評会にみる早熟型と晩成型

ジキンの品評会には「特別優秀魚指定審査会」という会がある。これがメインイベントである。一〇月の最終日曜日に、岡崎公園でおこなわれる。その他には、クロコ研究会が六月と七月の最終日曜日におこなわれる。クロコとは色の変わる前の段階のジキンのことである。この研究会ではクロコの体形と尾形を見る。しかし、研究会で一位になったクロコがよいジキンになるとは限らない。ここで上位を取ったウオはだいたい指定審査会には出てこない。ウオにも早熟型と晩成型がある。ジキンにとって体色の変わる段階が勝負である。基本は体形であるから、体形の悪いウオはどうあがいてもダメだが、そこそこの体形のものであれば、飼い方しだいでよいウオになっていく。品評会で一番になったウオというのは、それから先はあまり出世しない。トウサイウオの一番、これが次の年にニサイギョになって、また品評会で一番になるかというと、だいたいそのようにはならないことが多い。死んでしまうことも多い。下の方の順位のウオが出世してくる。品評会で中くらいの順位の魚が次の年にはよくなる。同じウオで三年連続優勝したことはない。品評会で、同じ飼育者が同時にトウサイ、ニサイ、サンサイとすべての部で優勝するのもむずかしい。晩成型のウオ、成長するに従ってじりじりとよくなってくるウオの方が出世する。最

初にスポットライトを浴びたウオは、早死にするかダメになっていくようである。

ウオは不思議なもので、品種のよさは一生のうちで一回は見せてくれるものである。それをさらによくするのが飼育者の心構えである。人間が作るのではない。ウオがよく見せてくれるように飼育するのである。

保存

ジキンでは金のやりとりをしない。人間関係を通じてウオのやりとりをしている。商売でやっているのではない。

ジキンにはきびしく決められた基準がある。その基準の中で好みの形のウオを作り飼っている。好き勝手に飼育されると本来のジキンの形が崩れていく。本来のジキンとは体形が異なっていたり、色が飛んでいたりするものが市場に出ている。そういう人が保存会のインターネットを見て、自分のジキンと違うのでびっくりされることがある。ジキンは本来の形を維持することが重要である。

トサキン（金魚の品種名）をみると、かつて高知の中でのみ飼育されていたが、それが東京でも飼育されるようになると、江戸流のトサキンができてきて、これが普及して一般形になった。大消費地で普及するとそれが本来の形になってしまう。ジキンでも、トサキンと同様な変化がおこっている。本来の形でないジキンが市場に出て、一般の人の間で飼育されている。その土地で聞きかじりの指導者ができて、ここから本家本元と異なる基準が作られると困る。

実際には、本場のところからウオをもらってよその土地で飼育しても、なかなか本場のようなウオにはならない。ナンキンをもらって飼育しているが、本場（島根県松江市）にはかなわない。気候条件の違いであろうか。

■日本の金魚には、地域的に孤立して独自な特徴が形成された品種がある。そのような品種には、ジキンをはじめ、トサキン、ナンキン、ヤマガタキンギョなどがある。限られた地域でひとつの品種のなかで、独自の飼育技術や鑑賞法が展開しているところが、日本金魚の特徴である。

ジキンを飼育するということは文化財の保存と同じことである。誰かが保存しなければならない。ジキンを売るということはしない。金魚屋ではないので金ではジキンは売らない。話をしてこの人は育ててくれそうだという人にジキンを分けている。情の世界である。卵を交換したり、ウオを交換したりするのも、仲間どうしの中、情の世界で動いている。だから、保存会の中の人間関係はむずかしい。保存会の年齢構成は、四〇代五〇代が若い方の世代で、超高齢の世界である。新会員が増えることはないが、へんな裾野が広がっている。ランチュウは大衆魚になって、水槽飼育で楽しむ層と品評会に出す層に二極化した。しかし、ジキンは大衆化させて本来のジキンの姿を変え

てはいけない。

三、ジキンの選評基準

二〇〇三年一〇月二六日（日曜日）に、岡崎市康生町の岡崎公園においてジキンの品評会（「平成一五年度特別優秀魚指定審査会」）が開催された。これは、毎年一〇月の最終日曜日に「四尾の地金保存会」の主催で開催されている。この日には、岡崎公園では「三河の菊まつり」（菊花展）も開催されている。「四尾の地金保存会」の二〇〇三年度の正会員数は四八である。品評会は、ジキンのトウサイギョ（その年に生まれたもの）の部、ニサイギョ（数えで二才になったもの）の部、オヤウオ（数えで三才以上のもの）の部に分類されておこなわれる。二〇〇三年には、トウサイギョの部には五〇匹、ニサイギョの部には四〇匹、オヤウオの部には三二匹が出品されていた。各部の審査は三名の審査員によっておこなわれる。そのほかに、各部に検査役一名がいる。検査役は、審査が公平に行われるように指導する。これらの審査をおこなうのは、保存会により公認審査員として任命された者である。そして、各部ごとに、特別優秀魚、優秀魚、準優秀魚が選ばれ、さらに、特別優秀魚には一席から五席までの順位がつけられる。その一席は「王魚賞」と呼ばれる。

品評会当日に審査基準として配布された「四尾の地金審査基準」と「四尾の地金審査要領」を、注釈をつけて以下にあげる。

「四尾の地金審査基準」

一　本質と其の表現

優雅の中に地味さと悍威を潜め、且つ品位を兼ね有するもの。

二　容姿（外貌）

（一）体躯は均斉がとれ長からず、太くして力感の表現を特に必要とする。

（二）体長と体高の比は当才魚約一〇〇対六五、二才魚や親は約一〇〇対六〇に近きものとす。

（三）泳姿淀みなく且つ悠然たること。

三　色彩

（一）口紅、頬紅、胸鰭、腹鰭、背鰭、楫鰭、尾鰭は各々濃い紅彩を見せ、頬紅以外は一カ所たりとも紅を完全に洗うことを許されず。

■本来、紅となるべき部分が白くなることをアライという。ヒレの先端（縁どり）や付け根の部分が白くなる「アライ」はよい。セビレの先端のアライが体の付け根まで抜けると失格である。

（二）細部の色彩

イ　口紅は三角形に小さく着くを理念（ママ）とする。

ロ　各鰭の紅は濃くして先端まで十分着色するものとする。但し二才魚又は親魚は尾先を洗うことがあり、其の質と量において許容される。

ハ　背鰭も同様にして完全なる紅を良とする。時として背鰭の先端は紅で被いながらも体に近い部分に洗いを生ずることがある。古来よりこれを「窓」とか「すかし」と呼称し許容される。但し親骨の一番は申すまでもなくタテに洗いのある魚は失格である。

ニ　尾鰭の紅も同様にして完全なるものが望ましく、二才魚以上の先端の洗いは質と量に於て許容される。但し親骨の一番を完全に洗うものは失格である。

ホ　尾皿の紅は尾鰭の紅の中に包合されていて尾の内面の裏皿を洗うのもにありては古来「花の芯」と呼称され許容される。

ヘ　その他の体色は一色の白で不純色は許されず、腹部の下方に少量の紅が残ることは許される。

■腹部の紅はわざと残して「野生美」をあらわすことがある。

ト　背鰭と尾鰭の紅は腰において明瞭に切り離さなければならない。

チ　頬紅は眼球の後部にて口紅と切り離さなければならない。

リ　「奴」とは眼の周囲は完全に切り離し頬紅からあごまでが紅となっているものをいう。

四　体部

（一）顔貌は左右均等にして曲りなく、且つ眼先の長きものを良しとする。

（二）弁に外傷又は病後の痕跡を残さず且つ密蓋なること。

（三）体巾は健康的な太さを必要とするも、肩部の体巾の過剰なるは減点とする。腹部の大きさが特に目につきやすいのも減点である。

（四）背鰭の末端と尾鰭までの間は腰であり、腰の短く太く力感のみなぎるを良しとする。但し二才魚、親魚の場合尾の角度が強くなって背鰭の後端をおさえて曲げることがあるが許容するも、当才にして尾鰭が背鰭にととかざるものは先天的なものとして減点する。

（五）尾皿は大きくありて尾鰭の要となり左右均等なること。

（六）楫鰭は上からみて出来うる限り腰下にかくれ、必ず二枚あり左右を同形に保ち、長くして且つ間隔の狭きものを「おがみかじ」又は「あわせかじ」と称賛する。又後方からみれば尾の間の裏皿の下方に二枚の

楫鰭がみられるものが良好である。若し「ハの字形」の楫鰭を持つ魚の場合はハの字の角度に於て減点の軽重があり、形状が小さなものを「たたみかじ」といい減点は強く、一本かじ又は二本でも一方が極度に小さき場合は失格とする。

（七）尾鰭は左右の形状を同じくし中段におさえを必要とする。二枚の尾は厚くして其の上にしなやかであり、親魚は游泳時に下端の先（ハフ）を合わせる位のしなやかさを望まれる。泳ぎを止めた後は静かに尾を開張（ママ）しながら左右に動かし優雅な姿をみせるを四尾の地金の美の真髄というべきである。

（八）側望のおり櫛形又は逆櫛形なれば其の優雅さは尚一層増すものである。

審査基準

一　尾	二五点
一　腰	二〇点
一　胴	一五点
一　カジ鰭	一五点
一　着色及び色彩	一五点
一　顔　姿	一〇点
合計	一〇〇点

右を採点基準による評点とするが、これにもたれ過ぎれば審査の円滑を欠く場合が生じる故に審査部員の神聖なる合議により席順を決定するものとする。

■審査基準が点数化して示されているが、審査は点数の合計ではない。審査長・審査員の三人が良いと判断した五匹から六匹の魚を候補としてあげ、審査用の洗面器に移す。それらを三人がいっしょになって順位をつけていく。その際、保存会の会長と検査役が立ち会う。

「四尾の地金審査要領」

一　小さな欠点にとらわれず四尾の地金としての型（短く均整が取れ腰が太く力強い）を重視してバランスの良い魚を選抜すること

欠落条件である　目の下の色のつながり　腰の色の切り放し　下唇の着色　舵鰭の一本のものや欠落極端な不揃いにはとくに注意すること

当才魚の洗いには十分に注意すること

規定の六箇所以外の体の着色は腹部下部の少量の着色を除き減点とし美観を損なうようなものは準指定魚の下位とする

二　魚の大きさはそれぞれの種目にふさわしい魚を選ぶこと

とくに当才魚の大きさには注意して過大・過小なもの

は排除すること
三　疑義のある場合は審査役・審査員全員で十分協議の上決定すること
意見の一致を見ない場合並びに特別優秀魚の順位決定については会長が協議に加わり決定する
四　審査基準点数
（省略）

参考文献

松井佳一　一九六三　『金魚　カラーブックス三四』保育社
松井佳一（編著）　一九七二　『金魚大鑑』緑書房
野地恒有　二〇〇二　「比較民俗学の可能性と課題―日本と中国の金魚飼育を題材として」『日本文化論叢』一〇：三五～五六　愛知教育大学日本文化研究室
野地恒有　二〇〇三ａ　「日本と中国における金魚観賞とその選評基準」『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇五：一九五～二一三　国立歴史民俗博物館
野地恒有　二〇〇三ｂ　「金魚の季節感」『日本語学』二二（四）：四～五　明治書院

（謝辞）

Ｋさんには、ジキンの飼育や観賞について、いろいろとお話を聞かせていただき、また、飼育のようすを見せていただきました。はじめてＫさんのお宅にお伺いしたのは二〇〇三年の二月五日でした。かねてから愛知県のジキンに関心を持っていた私は、愛知県史編さん室に情報収集をお願いしたところ、Ｋさんのことを教えていただいたのでした。そのときには、はじめての訪問であったため、詳しいお話は伺うことはできませんでしたが、その出会いを出発点として本稿に結びつけることができました。

二〇〇三年五月一八日の愛知県史編さん委員会民俗部会で、二〇〇四年度に刊行される『愛知県史』の別編「民俗三（三河編）」の構成が検討されました。その調査執筆には私も関わっているのですが、その目次案に、豊橋市のジキン飼育は入れられませんでした。私の提示したジキン飼育という主題は、この会議で検討される以前に、「民俗編三」の構成案からはずされていました。ジキン飼育は、食物獲得の活動でもお金を稼ぐための活動でもないため、目次の「生業」という項目に位置づけることができなかったのです。そもそも、民俗学という研究分野のなかで、金魚の飼育や観賞という主題そのものが存在していません。Ｋさんは、ジキンを商売として飼育しているのではなく、また、遊びや癒しのために飼育しているのでもありません。ジキンという品種の継承と保存のために飼育していることを話されました。ジキンに注がれた愛情と情熱と使命感を語られたお話は、忘れることができません。

二〇〇三年八月には、私の勤務する大学のゼミの調査として、

調色作業を見せていただきました。二〇〇三年の夏は天候不順だったため、Kさんが調色作業をおこなう日程がなかなか定まらず、たびたび、その作業を見せていただく日程調整の連絡をさせていただきました。お忙しいなか、ごめんどうをおかけしました。そして、ついに、八月五日に調色作業を見ることができました。また、ジキン飼育に関するさまざまなお話もくわしく聞かせていただきました。一〇月二六日には、岡崎公園でおこなわれたジキンの品評会にお邪魔して、その審査のようすを見せていただきました。本稿は、八月と一〇月に得られた資料をもとにまとめました。金魚というテーマは、観賞用の動植物の飼育栽培にみられる改造技術の研究です。これからもジキンや金魚をはじめ観賞用動植物の調査を続けていきたいと考えています。